

Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.146
2015.11.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

加曾利B式土器

— E.S. モースと坪井正五郎のはざまで —

鈴木 正博

● 第6回 ● 土器片研究の指導方針・その2

「外部縁飾り」の解説は定義を暗黙としたが、地紋を考慮しない分類に気づいた方に対しては予め定義の解説が必要となる。「縁飾り」とは「**上端近き所に在って縁と並行して居る飾り**」を指し、それは内部・外部・上部を問わず共通することから、西ヶ原貝塚では土器片の「**装飾**」と呼ぶ。「装飾」に対し工程的部位的にも「縁飾り」の下に施文される縄紋などは、後述する「**紋様**」と区別する。

口縁部断面と外面口縁装飾に続いて、第9図では内面口縁装飾**172片**(他に無装飾は139片)を8細別(「**半筋巻き**」「**一筋巻き**」「**一筋半筋巻き**」「**二筋巻き**」「**三筋巻き**」「**数珠と四筋**」「**片矢筈**」「**二重数珠**」)する。標本図からは概ね堀之内2式~加曾利B1式の特徴で、精製・粗製二者に付される「**一筋巻き**」の**比例が6割弱**を占める現象は比較的狭い年代幅を意味する。

ここで今日から見て年代が異なる安行1式の「**席卷き**」22片と「**点々巻き**」21片の計43片に対応する内面口縁装飾を問題とするならば、どのように分類されたか、気になるであろう。

この点においても坪井正五郎の分析は**分類の相互関係に威力を発揮する構造化**を図る。具体的には「**内外面両縁飾りの関係**」を「**第二十二表**」(引用省略)として開陳するが、これこそが内外面装飾における**属性クロス表**そのものである。内外面属性クロス表を参照すれば、安行1式特有の内面稜は第9図の分類に

は該当せず、「**席卷き**」と「**点々巻き**」の内面は無装飾である「**無飾**」に分類されたことが判明する。

こうして311片から安行1式43片を除いた全体268片の多少は、「**両面無飾**」71片、いずれか装飾では「**太縄巻き内一筋巻き**」53片、「**無飾内一筋巻き**」45片、「**細縄巻き一筋巻き**」26片、「**帯巻き一数珠と四筋**」15片等々の順となり、堀之内2式~加曾利B1式の属性が主体を占める。

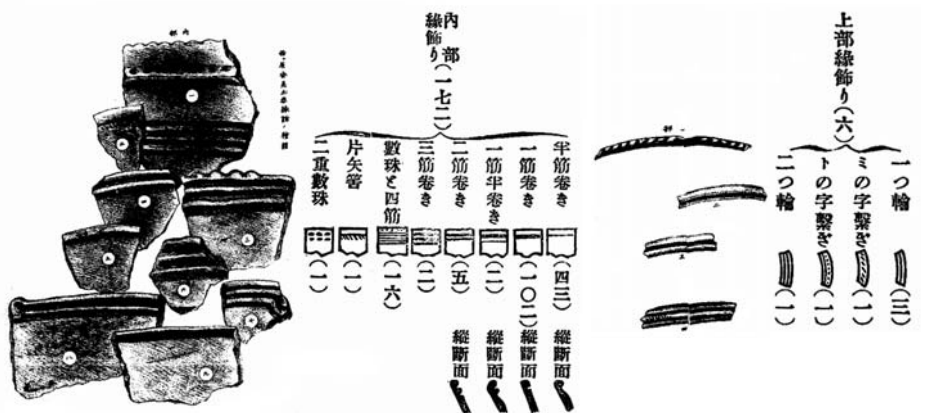
第10図の口唇部装飾は僅か**6片**でも4細別(「**一つ輪**」「**ミの字繋ぎ**」「**トの字繋ぎ**」「**二つ輪**」)する。標本図からは加曾利B1式の「**一つ輪**」を除いて主として堀之内2式の特徴である。

以上、坪井正五郎は口縁部311片(含む「**完全物**」・「**殆ど完全物**」・「**大体の形の分かるもの**」)に対し、第7図~第10図を要とする「**装飾**」分類と分類間の関係を求め、底部158片も形態と底面の

「**押し形**」の分析を進めるなど、モースの**大森貝塚に対する近代化を統計学により達成**したのである。

さて、「**装飾**」分析が済んでも目の前には「**縁と底との中間即ち胴の部分の破片**」があり、その数は口縁部破片の数倍に及び**1,342片**に昇る。坪井正五郎は更に口縁部311片を加えてこれらの胴部片と真正面から対峙するが、その対峙の仕方は「**土器の紋様の調査**」と称し、実にスマートである。「**紋様**」分類別の多い順に「**装飾**」分類別を再クロスすることで、「**紋様**」別「**装飾**」別の代表的な組み合わせを抽出するのであるが、ここまでは純粋に統計学の範疇であり、初学者の通過儀礼として最適である。

他方で坪井正五郎の思考法が当世**優生学**の強い影響を受けていることは、山内清男の皮肉った文章にも端的に表れているが、後述する「**様式**」導出観の展開において垣間見られる。



▲第9図 西ヶ原貝塚の「内部縁飾り」分類と標本図

▲第10図 西ヶ原貝塚の「上部縁飾り」分類と標本図

※巻頭連載は隔月です。次回は再び神村先生です。

目次

- 加曾利B式土器 土器片研究の指導方針・その2(第6回) 鈴木正博 …1
- 考古学の履歴書 良き師・良き友に恵まれて(第24回) 渡辺 誠 …2

- リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト(第139回) 天本昌希 …2
- 考古学者の書棚 『信濃・長原古墳群 一積石塚の調査一』 西山克己 …4

考古学の履歴書

良き師・良き友に恵まれて(第24回)

渡辺 誠

31. 縄文文化の小文化圏・環境と生活

先に記した物質文化史路線は、角田先生の古代文化の主要な二つのうち文献のない、縄文文化の考古学資料と、中・近世の考古学資料、そして民具とをタテにつないだ研究であった。しかしその一方で、文献のない縄文文化の研究を深める方法として、文献に相当するものとして自然科学的知識を必要とする研究であった。それらを統合したものが、いわゆる考古生態学である。こうした観点からの研究の必要性を指摘されたのは、岡崎 敬先生であった。

日本列島は南北に長いと、環境の違いが大きい。それらは主に森林相と海の多様性とでみることができる。とりわけ海の多様性と水産資源の多様性、そして漁撈の実体とを遺跡・遺物に即して研究して、はじめて考古生態学といえるのである。森林相だけでは縄文人の生活を知ることは難しい。

こうした観点からみると、列島全域に展開する縄文文化は、九つの小文化圏に分けて考えることが妥当と考えるようになってきた。永く温めていたその成果を初めて大きくまとめたのは、週刊朝日百科・日本の歴史の第36号(昭和61年)の『原始・古代3、火と石と土の語る文化』であった。そしてありがたいことに編集者は私の希望を聞いてくれて、各文化圏のはじめに、その地域の特徴がよく分かるような写真を大きく載せて下さった。たとえば「流氷の海の家獣漁」では流氷にのるアザラシ、「サンゴ礁の漁民たち」ではサンゴ礁の空撮などを入れてくれたのである。

海の違いは、大きくみて、岩手県の海岸を堺に寒流域と暖流域、沖縄のサンゴ礁海域とに大別されるばかりでなく、特に本州の大部分を占める暖流域では遠浅の内海や河川漁業も発達している。

そして個々の貝塚では、魚骨や貝類の研究は必須なこととなる。これらについては恩師江坂先生ばかりでなく、金子浩昌先生からも多くの御教示を頂いた。

これらを実際に見て回することは容易ではなかった。北海道では大場利夫・嶺山 巖先生・旧友の石附喜三男・野村 崇氏など、御教示下さった方々はここでは挙げきれない。

東北では特に石巻の楠本政助氏の御教示が大きかった。また、いわきの大竹憲治氏にも大変お世話になった。また三陸地方では、今でも関わり合いは強い。しかし、その中で、先の津波で親友の佐藤正彦氏を失ったことは、今でも悔しくてならない。まさかこんなことがあるとは露知らず、一緒に調査した陸前高田市の門前貝塚では、台地下の平地から長さ・幅ともに6mもある、大きな弓矢状の配石遺構を発掘した。当時どう思うかと聞かれ、海からの魔物を防ぐためと言ったが、よもや現実になるとは恐ろしいことである。

この三陸地方では北海道から南下した海獣用の離れ話に加えて、マグロ・カツオ・タイなどのための、各種の釣針が発達する。これらを総合的にみて、私は水産日本の基礎を作った地域とみている。これらは後期初頭には関東地方にも南下し、さらに後期半ばには東九州にも達している。この大きな伝播の

背景には、今度のような大被害があったのではないかと考えたくなる。土器の磨消縄文ばかりでなく、抜歯の風習まで一緒に伝わるのであり、災害から逃れた大勢の人の移動があったのではないだろうか。

この流れは西九州には少し遅れて伝わり、独自の遺物も多岐に分かっていた。この地域のことは、学生の指導も含めて山崎純男氏にお世話になった。そして韓国関係もまたお世話になることが多かった。後に自分自身で訪韓するようになったが、腰岳産の黒曜石が全羅南道にも伝わる一方で、韓国のオサンリ型釣針が伝わるなど、交流が深いことも分かった。その相互交流のうえに米作が伝わったのであろう。

そして沖縄でもいろいろな方にお世話になった。はじめて沖縄に行ったのは、江坂先生と親しかった新田重清先生に、久米島のヤジャーガマ洞窟の発掘に呼んで頂いた時である。その後安里嗣淳・安里 進氏などにお世話になったが、特に盛本 勳氏には大変お世話になった。

このようにして、全国を不十分ながら歩き回って研究してきたが、このことが思うように進められたのは、妻の協力も大であり、死後では間に合わないが、記して感謝しておきたい。

32. 原田大六先生のこと

主として修士論文作成のための抜歯人骨や関連文献を求めて、九州へ出かけたのであるが、それに拍車をかけたのは西日本新聞の連載記事である。金関丈夫先生の「続 発掘から推理する」や原田大六先生の「万葉解釈への反逆」は、圧巻的な内容の連載であった。それを毎週切り抜いて送ってくれたのも、後に結婚した女性であった。

そしてなぜ万葉集の研究ですかと伺ったところ、馬鹿者と一喝された。そんなことも分からないで私の家に来たのか、ということである。鏡・剣・玉の三種の神器について古代人はどのような考えを持っていたのかは重要なことであり、まくらことばと決めただけで済まされることではない。

実際先生の解釈は無理のないおらかなもので、納得のいくものであった。高校生だった時、ある友人と和歌の勉強をした。そして古今・新古今集の歌は意味が分かるが、万葉集にはわけのわからないまくら言葉があって、意味が分からない。注釈書を読んでも難しい注釈ばかりである。こんなのが文学作品なのかと思ったほどである。しかし原田先生によると深い意味があり、歌の根幹に関わることだとよく分り感激した。

略歴

昭和13年11月18日 福島県平市大町(現いわき市)に生まれる
 昭和32年3月 福島県立磐城高校卒業
 昭和33年4月 慶應義塾大学文学部入学
 昭和43年3月 同上大学院博士課程修了
 昭和43年4月 古代学協会平安博物館勤務
 昭和54年8月 名古屋大学文学部助教授
 平成元年4月 同上教授
 平成14年3月 同上定年退職、同上名誉教授
 平成15年4月 山梨県立考古博物館々長・同埋文センター所長(18年3月まで)
 平成18年7月 日本考古学協会副会長(平成22年5月まで)

隔月連載です。次回は岡田淳子先生です。

Jレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 139

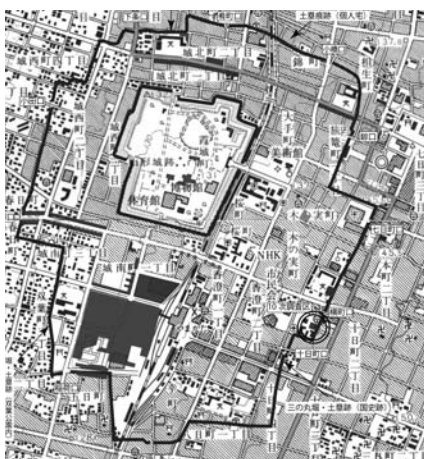
山形城三の丸 ～ 山形県山形市

天本 昌希

学生時代、旧石器時代を勉強した私は、生来の怠惰な性格もあり、思えば石器以外のことをろくすっぽ勉強しないまま卒業してしまっただけ。結果、仕事として埋蔵文化財を担当するようになると、土器だけでなく、遺構についてもさっぱり知識や調査技術が足りないことを痛感させられた。以来、担当する遺跡については、どのような時代、内容であっても選り好みせず勉強していかうと自身に言い聞かせてきた。職場が千葉から山形に移っても、それだけは変わらずに目の前の遺跡に全力を投じてきたつもりである。そして担当したのは山形城三の丸の調査だった。先に殊勝なことを述べておきながらも、当初担当が決まったとき、ついに近世に当たってしまったかと、正直、思ったものだ。

山形城は16世紀後半に、最盛期57万石を誇った最上義光の統治下で、三重の堀を備えた平城として整備された。最上氏が三代で改易となると、以降は城主が次々と変わりながら明治を迎える。1986年に史跡指定され、現在、本丸、二の丸の内郭部分が史跡公園として開放されており、山形市教委によって整備復元のための調査が進んでいる。外郭の三の丸は明治期の廃城後、奥羽本線山形駅の敷設など市街地に変わっていった。そのため、三の丸跡の調査は、様々な開発に伴い、あちこちで複数回の発掘調査が行われている。

私が担当したのは、山形県埋蔵文化財センターの行う三の丸第10次調査で、県施設の建築に伴う1000㎡にも満たない調査面積のものである。しかしながら、山形城東部に広がる城下町（現在の七日町商店街）と城内とを隔てる三の丸の外堀跡が、調査区全面に検出した。堀跡は、上面こそ現代の攪乱を受けているものの、地表面から深さ5mを超えるもので、下面の保



▲三の丸位置図

存状態は良く、城郭の構築から廃棄までを考える上で重要な資料である。調査は真夏の炎天下でひたすらスコップを振る、バケツリレー方式で排土するものとなった。延々と続く重労働に普段温厚な作業員さんたちの間にも、この調査のと



▲三の丸外堀

きにはピリピリとした雰囲気の流れが流れていた。スコップの使い方ひとつ、排土の渡し方や土の量ひとつで言い争いが起き、ひたすらなだめながら作業を続けてもらったのを覚えている。

この堀の覆土は、大きく4層に分かれ、下から最下層、下層、中層、上層とした。注目すべきは下層と中層で、炭化材や日用什器が大量に出土し、火災廃棄層と考えられる。この層の出土遺物の中に、「明和五年戊子四月」と刻まれた硯や、「明和九年壬辰6月」と墨書された木材があることから、明和年間（1764～72年）が下層の火事の上限を示す紀年銘資料といえよう。中層は、粗砂と細砂が互層に数十cmほど堆積する層であり、洪水などの水性堆積であることが考えられる。この火事と洪水の年代を推測できる文献記録を当たってみると、『古今夢物語』や『事林日記』に城下の出来事は数多く記されている。大きな火事としては、1819（文政2）年に起きた「和右衛門火事」で、七日町から出火し、市内北部を中心に1000軒余を焼く大火になったと記される。調査区周辺の横町でも30軒の被害が出たとある。更に洪水の記録は、5年後の1824（文政7）年の「申（さる）洪水」と呼ばれる大洪水がある。8月の大風雨で付近を流れる馬見ヶ崎川が氾濫し、現山形市内北部を中心に多数の家屋が流失したと伝えられる。調査区周辺は、それよりも高い標高にあるものの、まったく被害がなかったということは想定しがたい。戦後、上流に防災ダムができるまで山形市内中心部は、何度も洪水被害に見舞われており、洪水の際、堀をつたって調査区周辺まで土砂が流れ込んだことは、十分に想定されるだろう。このようにこの堀跡は、城下の出来事を明確に包含しており、今後更なる資料の増加が期待される。

近世、近代の資料は、大量かつ多種にわたる。特に陶磁器の産地の同定や、バラバラになった木製品の部材からの器種判断などは、不慣れな身には大いに苦労したものだ。報告書に結局「不明」としたまま掲載せざるを得なかったものも少なくはなく、省みるところは多い。とはいえ、自分自身にとっては、多くのことを新たに学ぶことができ、文献も含めた多種多様な資料が立体的に復元してくれる歴史像は、他の時代にはない面白さがあった。終わってみればすべて良い経験であり、改めてどのような時代、どのような内容でも勉強していかうと思える初心に返れたような調査だった。

現在、私の担当した10次調査区には、3階建の建物が建っている。廃城から100年以上が経過し、山形城三の丸の痕跡は、跡形もなく市街地に飲み込まれているように思える。しかし、注意深く見てみると、公園の不自然なくぼみ、小学校の裏庭など、市内のあちらこちらに土塁や堀の一部が残っている。また、現在の地図と江戸期の絵地図を比べれば、現在の市内の区割りにも大きな影響を与えていることがわかるだろう。この痕跡をたどりながらする山形の街歩きは、市民にとって街の時間軸の立体性を豊かにしてくれる大きな楽しみである。山形城三の丸の調査は、市民の関心も高く、資料的な価値も高い。市街地の調査は、様々な困難が伴うが、今後とも開発に対して遺漏なく調査が行われるよう努力して行きたい。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは笠井崇吉さんです。

考古学者の書棚

『信濃・長原古墳群－積石塚の調査－ 長野県考古学会研究報告書5』

大塚初重・小林三郎・下平秀夫 著／長野県考古学会 (1968)

西山 克己

18歳の春、どうしても明治大学サッカー部に入部したく、また考古学の知識は好きな程度でしたが明治大学考古学専攻で勉強をしたく、サッカー部のセレクションを含め明治大学考古学専攻を受験しました。他の大学を受けることなく失敗し、1年浪人することとなりました。このときの明治大学のサッカー部には国内プロ1号となった木村和司さんやなでしこジャパン監督の佐々木則夫さんがいました。

そして1年後、明治大学の考古学専攻に入学することとなりましたが、同級生や諸先輩方は考古ボーイが多く、ちょっとした考古学の会話にも苦労しました。出会った同級生や諸先輩方からのお誘いなどで、鎌倉市の発掘調査に参加したり、長期休みには大塚初重先生や小林三郎先生と茨城県内の虎塚壁画古墳や宮中野古墳群などの調査に参加し、また奈良国立文化財研究所飛鳥・藤原宮跡発掘調査部の調査には4年間参加させていただきました。

図書や報告書に関わり学生時代の大切な思い出として、大学1・2年生の時に奈良国立文化財研究所の松村恵司さんや木下正史さんほかの方々から以下の報告書などは基本文献となるから購入しておきなさいと教えられました。

- ・『陶邑古窯址群I』 平安学園考古学クラブ 1966年
- ・『平城京発掘調査報告書VII』 奈良国立文化財研究所 1976年
- ・『陶邑III』 大阪府教育委員会 1978年
- ・『飛鳥・藤原宮発掘調査報告書III』 奈良国立文化財研究所 1980年

そして、大学を卒業すると、指導教授であった小林先生から「考古学陳列館」に嘱託職員として来ないかとお誘いを受けることとなりました。

昭和58年6月からの2年10ヶ月の間、考古学陳列館（昭和60年4月より明治大学考古学陳列館改め明治大学考古学博物館と改称）に勤務することとなります。2年目の昭和59年夏、長野県大室古墳群の第1次調査が8月2日から8月31日まで行われ、大塚先生・小林先生・石川日出志先生、そして大学院生・学生とともに大室古墳群の調査に参加することとなりました。この調査に参加したことが、この後大室古墳群に関わり、積石塚古墳や合掌形石室の勉強を続けるきっかけとなりました。

考古学博物館に勤務して3年目を迎えた頃、長野県では長野オリンピックを招致し開催するための高速道路交通網他整備関連の大規模開発が進められます。これに伴う大規模発掘調査が進められることとなり、長野県としては考古学専門職員採用は急務だったようです。

昭和60年7月、長野県との関わりが強かった戸沢充則先生より「早々に長野へ行ってくれないか」とのお誘いをいただきました。直接の指導教授ではなかった先生からのお誘いに驚いたのを覚えています。直接の指導教授は小林先生であり、また大塚先生、小林先生の元で4年間お世話になった

立場であり、小林先生からは来年度も考古学博物館に残りなさいと言われていました。また生まれ育った横浜市西区から離れたくなかったことから、神奈川県内の就職を考えてもいたので、長野県からの幾度かのお誘いもお断りしていましたが、結果的には昭和61年1月、戸沢先生からいただいたお電話において、昭和61年4月から長野県での調査に参加し、長野県の試験を受けることをご返事することとなりました。

早々に小林先生のご自宅へうかがい、書齋にて経過とお詫びをお伝えしましたが、先生は経過をよくよくご承知であり、お心づかいからか、長野に行くならと貴重な『信濃・長原古墳群』を書架から取り出され手渡ししていただくとともに、長野でも頑張りなさいと言っておられました。

『信濃・長原古墳群』には、長原古墳群18基中の住宅団地造成に関わる13基についての発掘調査記録が掲載されています。明治大学教授であった後藤守一先生と助手であった大塚先生が、昭和26年に大室古墳群の調査を行って以来の積石塚古墳群の発掘調査でした。

本書は13基の古墳の発掘調査報告に加え、「長原古墳群の形成過程について」・「長原古墳群の性格」・「信濃の古墳文化と長原古墳群」・「結語」などの論考も掲載され、この中で、大正15年に森本六爾氏によりまとめられた『金鑑山古墳の研究』の中で報告され、長原古墳群の調査時には破壊され無くなっていた「ニカゴ塚古墳」や周辺積石塚古墳群・被葬者・渡来人・馬匹について論考され、積石塚古墳や合掌形石室を研究する上で学史的に重要な報告書となっています。

「序」文は杉原荘介先生が書かれ、この中には「遺跡の重要性を考え、大塚初重教授と小林三郎講師ほか専攻学生15名を派遣することを決定した。同年2月下旬から中旬にかけて、酷寒と降雪に苦闘しながらも、調査をつづけ、良好な成果をあげることができたのである」と書かれています。また「上梓のことば」の中で、「・・・長原古墳群の徹底的分析の成果をあげて、当冊に圧縮、ここに上梓させていただくこととなった喜びは、あげつらうてだてもない。本学績は燦として永久に残ることであろう」と藤森栄一長野県考古学会会長が書かれています。

小林先生よりいただいた『信濃・長原古墳群』は、筆者にとって、この後大室古墳群・積石塚古墳・合掌形石室・渡来人などの勉強を続けてきた原点であり、また故小林先生からいただいた思い出深い報告書なのです。

お詫びと訂正

145号P3「マイ・フェイバレット・サイト」138の右下側から12行目、「成功」は「成立」の誤りでした。
訂正し、執筆者並びに読者各位にお詫びいたします。

編集子

アルカ通信 No.146

発行日 2015年11月1日
企画 角張淳一(故人)
発行 考古学研究所(株)アルカ
〒384-0801 長野県小諸市甲49-15
TEL 0267-25-0299
aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp